

第4章 総括

本調査で検出された遺構から、古宇木遺跡では弥生時代中期と同後期、古墳時代後期に集落の形成が認められた。古墳時代前期から中期にかけての遺構は検出されず、この期間は別の場所に集落が移動していたと考えられる。また、奈良時代以降に関しては、平安時代の遺物が少量出土しているが、該期と判断できる遺構は検出されなかった。奈良時代以降は再び集落が移動したと推察する。調査で確認できた範囲は限られるが、調査成果をもとに、予想される古宇木遺跡の集落の広がりと、浅川両岸の諸遺跡との関連について概観し、総括したい。

弥生時代中期と後期の遺構は、いずれも竪穴住居跡を1軒ずつ検出したのみであり、集落規模や範囲を想定することは難しい。SB 2は住居跡の平面形態や出土土器から弥生時代中期後半の栗林式期の竪穴住居跡と考えられる。出土土器の大半が破片資料で器形の全容を把握できる資料がないため、栗林式期における時期の細分は困難である。

長野市内におけるこれまでの発掘調査成果から、該期の集落は、住居数が数十軒に上る大規模な集落と、10軒前後の比較的小規模な集落が存在することが指摘されている。浅川扇状地においては後者が多数を占め、扇状地上に小規模な集落が点在する様相が看取されることから、古宇木遺跡で検出された該期の集落もこうした小規模集落である可能性がある。今回の調査では、該期の集落範囲を推定するには至らなかったが、調査区外に同集落の居住域が展開していくと考えられる。なお、古宇木遺跡周辺では、浅川端遺跡、檀田遺跡、神楽橋遺跡などで弥生時代中・後期の集落が検出されている（註）。

古墳時代後期の遺構は、竪穴住居跡3軒を検出した。このほか、時期不明とした竪穴住居跡が2軒あるが、土層の堆積状況と遺構の重複関係から、少なくとも古墳時代の範囲に収まると考えられる。時期確定の根拠となる遺物を検出することができなかつたが、調査区全体を通して古墳時代前～中期の遺物がほとんど検出されなかつたことから、古墳時代後期の遺構である可能性は高いといえる。古墳時代後期の竪穴住居跡は調査区の北端に集中し、3軒が重複した状態である。出土遺物からは大きな時期差は見出せず、一定期間継続して居住していたと推察する。現段階では集落範囲は不明と言わざるを得ないが、遺構の分布状況から調査区以北の標高408m付近に同集落の居住域中心部が存在したと考えられる。なお、調査区以南に関しては竪穴住居跡の密度は低くなることが予想されるが、集落縁辺部の遺構が展開する可能性がある。

浅川扇状地において、古墳時代後期は集落が著しく増加した時期である。住居数20軒を超す大規模集落が形成され、その周辺に数軒から10軒規模の小集落が点在する傾向が認められる。古宇木遺跡周辺で注目されるのは、本調査地から北東へ約250mの地点にある浅川端遺跡である。浅川端遺跡は、浅川右岸の微高地上に形成された集落遺跡で、弥生時代中期から平安時代までの集落跡が確認されている。同遺跡において最も集落規模が拡大したのは古墳時代後期で、50軒に上る竪穴住居跡が検出された。重複が多く、同時期に存在した住居数は検出数と同等ではないが、大規模な拠点的集落であった可能性は高いと考える。浅川端遺跡の古墳時代後期集落を浅川右岸における拠点的な集落と仮定するならば、その位置関係から、古宇木遺跡における古墳時代後期集落は、浅川端遺跡周辺で衛星的に形成された小規模集落の一つと推測される。

本調査は、古宇木遺跡内において初めての発掘調査であり、複数時期にわたる集落の形成を確認することができた。しかし、確認し得たのは遺跡範囲の一部である。今後、調査地周辺の埋蔵文化財包蔵状況の把握に努めるとともに、周辺遺跡を含めた古宇木遺跡の検討が課題である。